

# 排斥手がかりに対する注意配分と排斥からの回復との関連

○伊崎 翼・小川 景子  
(広島大学大学院総合科学研究科)

## 【目的】

他者からの排斥を経験すると、排斥手がかりに対する注意配分は減衰する (Themanson et al., 2013)。発表者らの先行研究 (伊崎他, 印刷中) では、排斥経験中に減衰した排斥手がかりに対する注意配分は、その後の受容経験中に排斥経験前まで増大した。しかし自尊心低群では受容経験中にも再度減衰が生じ、排斥経験中に減衰した排斥手がかりへの注意は増大しないことが示された。自尊心低群ではさらに、受容手がかりに対する注意配分も小さく、これが排斥手がかりに対する注意配分が増大しにくい原因である可能性がある。

また、受容手がかりに対する注意配分は主観的な回復と正の関連を持つが、排斥手がかりとの関連については検討されていない。そこで本研究では、受容手がかりへの注意配分が、排斥手がかりへの注意配分に及ぼす影響、そしてその後の主観的な回復に及ぼす影響について検討を行う。

以上より本研究では、(1)自尊心低群における排斥手がかりに対する注意配分が、受容手がかりに対して注意を促すことで増大するか、(2)受容手がかりへの注意配分が、排斥手がかりへの注意配分に及ぼす影響やその後の主観的な回復に及ぼす影響について検討を行った。注意配分の指標には、刺激に対する注意の程度を反映する事象関連電位 (P3b) を用いた。

## 【方法】

**実験参加者** 大学生・大学院生 30 名 (女性 20 名, 男性 10 名,  $M_{age} = 21.47 \pm 1.01$ ) が参加した。自尊感情尺度翻訳版 (山本ら, 1982; 10 項目) を用いて、低群と高群を設けた。

**課題** 参加者はサイバーボール課題 (Williams et al., 2000) を、排斥セッション、受容セッションの順で行った。サイバーボール課題では、他者間での投球が排斥手がかり、参加者に対する投球が受容手がかりとなる (Themanson et al., 2013)。受容手がかりに対する注意配分を増大させる方法として、受容セッション中、自分に対する投球の回数をカウントするよう教示した。

**生理指標** 脳波は頭皮上 21 部位より、水平・垂

直眼電図は左右眼角外・左眼窩上下より測定した。**主観指標** 主観的な回復は、排斥セッション後の、ネガティブな主観反応である、欲求脅威 (欲求脅威尺度翻訳版; Kawamoto et al., 2014) から受容セッション後の欲求脅威を引くことで算出した。**分析** 各セッションを前後半 30 投球ごとに分け、全 4 区間における排斥手がかりへの P3b 振幅の変容に対する特性自尊心の影響を検討した。また、受容セッションにおける受容・排斥手がかりに対する P3b 振幅を説明変数とし、主観的な回復の程度を目的変数とした、階層的重回帰分析を行った。

## 【結果】

分散分析を行った結果、区間の有意な主効果が示された ( $p < .01$ )。下位検定の結果、他の 3 区間よりも排斥セッション後半で P3b 振幅は有意に小さいことが示された ( $ps < .01$ )。

階層的重回帰分析を行った結果、有意な交互作用が示された ( $p < .05$ )。下位検定の結果、受容手がかりに対する P3b 振幅が大きい場合 (+1SD 以上) では、排斥手がかりに対する P3b 振幅と主観的な回復との間に正の関連が示された ( $p < .04$ )。

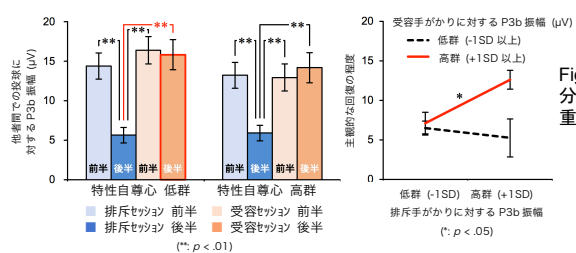


Figure 1. 分散分析の結果 (左) と、重回帰分析の結果 (右)

## 【考察】

本研究結果より、投球された回数を数えることで、特性自尊心の高低群ともに、排斥セッション後半で一時的に減衰し、受容セッション中に排斥セッション前半まで上昇することが示された。この結果より、特性自尊心低群では、受容手がかりに対して注意を促すことで、排斥手がかりに対する注意も適切に回復する可能性が示唆される。

また受容手がかりに加えて、排斥手がかりに対してもより注意が配分されるほど、主観的な回復は大きかった。そのため、受容手がかりに加えて、排斥手がかりに対してもより注意が配分されることで、主観的な回復は促進される可能性がある。